



【ものづくりの新潮流】◆———・小松電機産業

自然と響き合う

山野美容芸術短期大学教授 森 清

新・地場産業

島根県の松江市は宍道湖を抱えていることで知られる。宍道湖は、日本海につながる中海という湖と大橋川で結ばれている。2つ合わせて風光を誇る地域の財産である。

その中海がいま話題になっている。戦後しばらくして始められた干拓が80年代に凍結されていたが、96年3月にいったって、改めて干陸を再開するよう県が国に要請したからだ。

これに対して反対の声も高く、環境庁からも環境への影響について再調査するよう要望が出るなど、今後の推移は不明である。

この問題について、地元の中堅企業である小松電機産業の小松昭夫社長は、積極的に具体案を提言し、同志を地域から中央にまで求めて東奔西走している。

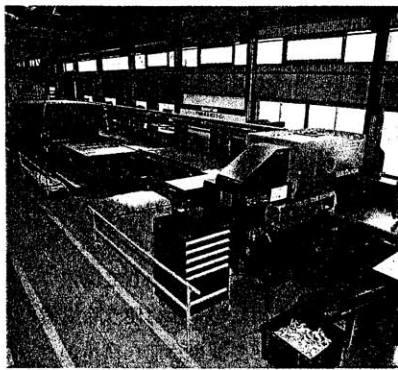
人は自然と共生すべし

小松電機産業は、工場などの開閉が頻繁な出入口につける急速開閉シートシャッター『門番』のメーカーとして80年代半ばから急成長した。90年代に入って水処理システムの分散型自動化技術を開発、『やくも水神』として商品化し、これを回分式活性汚泥法でグレードアップして注目されている企業である。

小松社長は、自社を環境装置メーカーととらえている。シートシャッ

ターは、内部を外気から守ること、つまり内部の温度と清潔度を維持する環境装置の1つであり、水処理システムは文字どおり環境機器だ。

環境装置メーカーであろうとする願いは《人は自然と共生すべし》という考えの実現を目指すことにつながる。そのためには、自社の成長だけにこだわってはいられない。地域に環境と共生する産業群を新しく興



同社の生産基盤である板金加工FMSライン

すことが重要と考えている。そこから生まれたのが、中海の一部に、その受け皿となるスペースを拓き、人と企業を集め、日本全土から世界へと商品や情報を発信するという計画である。

これこそ、新たな21世紀の地場産業創生と評価している。成功すれば、各地の地場産業興しのモデルになることは間違いない。それだけに、成功させなければならない。

技術開発と地域貢献

小松社長と会社は、90年代に入ってから大きな賞に恵まれている。

列記すると、次のようである。

- 90年 中小企業研究センター賞
- 91年 日刊工業新聞社・優秀経営者顕彰、同地域社会貢献者賞
- 95年 科学技術庁・注目発明選定証
- 96年 日本経済新聞社・地域活性化貢献企業賞

いずれも、容易には得難い賞である。小松社長は「島根という地域の企業だから注目されただけで、首都圏などであれば、私どものような企業は隠れてしまう」と謙遜するが、地域で注目され、中央で評価される結果であり、確かな技術と明確な企業目標にそった活動の成果である。

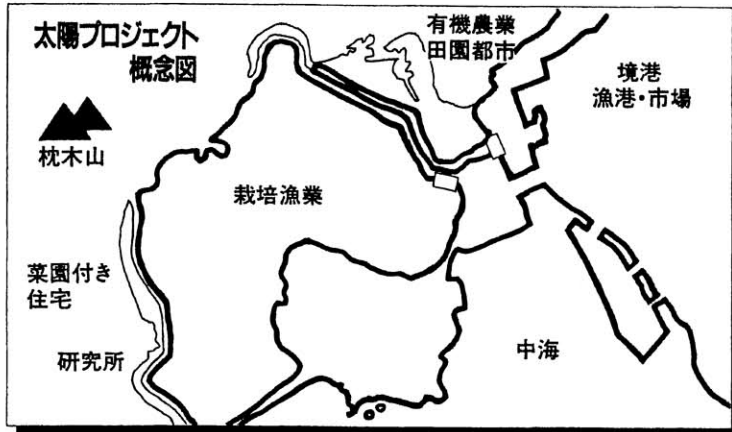
これらの賞は、大きく2つに分かれる。1つは新技術の発明であり、もう1つは地域貢献である。しかも2つがリンクしているところに注目したい。

技術発明では『門番』の絶対に落下事故が起きないという安全性に特徴がある。そして、『やくも水神』は、集落排水の広域監視を可能にしたこと、脱窒素レベルを定められた水質基準より桁違いに下げられるのが特徴だ。

島根という地域は、寒さが厳しく、

H8.7(戦略経営者)

経営最前線



風が強い。『門番』は、その地域需要に応えながら、販路の全国展開に成功したことで同社を急成長させ、地域経済にも大きく貢献した。『やくも水神』は、集落排水処理施設の初期投資とランニングコストを大幅に下げ、また処理水の農業用水への利用を可能にして地域に寄与した。

つまり、今日において地域需要に対応した技術開発は、地域貢献のみならず、他地域への波及によって全国レベルへの貢献となるのである。

5つの上場企業を創る

《社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう》——小松電機産業が、81年に定めた社是である。

これを大書した看板は、その時に社屋の前面の壁に掲げられ、今もはずされていない。今日までの15年間は、この実現のために費やされた。

これからの同社は、新しい地場産業の核となるべく、活発な活動を続けていく。すでに店頭公開をいくつかの証券会社から勧められ、社としても実現させるべく計画している。しかし、自社だけが公開を果たしたところで、大きな社会貢献は果たせないと考え、当面は中海への新産業

の集積に力を傾注している。

小松社長が推進する『太陽プロジェクト』は、中海の一部の、すでに完成している水門と堤防を利用して、島根県が提案している中海1700ヘクタール（本庄工区）の干陸ではなく、堤防と陸部との間にある500ヘクタールほどを埋め立て、そこに有機農業の拠点をつくり、内水面を栽培漁業の場にする。さらに、農漁業とそれに関連する工業の技術開発をするために研究所をつくる。それらの事業を推進するために志のあるベンチャー企業家を集め、①栽培漁業関連事業、②有機農業関連事業、③知的環境観光事業、④水処理施設関連事業、⑤総合企画研究事業の5つの分野で上場企業を創出するのが目標だ。

このうち、水処理施設と総合企画研究の事業については、小松電機産業にその実績がある。研究事業では、HNS研究所をすでに発足させていて、今回の新地場産業興しの企画立案、推進活動を担っている。HNSとは、人・自然・科学の英字頭文字をとったもので、研究所はそれらの融合による新しい文明の創造をも視野におく。

小松社長は当面、このような事業

会社概要

所在地	島根県八束郡八雲村東岩坂180
代表者	小松昭夫
売上高	35億円
社員数	85名

に興味を持つ人々を集めて研究を進めるために『ベンチャー・アカデミー・太陽』という研究会を組織したいという。

地場産業が新しくなる

これだけの事業となれば、中堅企業、中小企業だけでは達成できない。大企業から行政まで巻き込んでの動きとなる。

従来の地場産業は、その地域に賭ける人がいて人を糾合し、育った人が起業して、その集積が地場産業となった。大企業との連携はあまり見られなかった。が、これからは地域企業が大企業を呼ぶ新しい時代である。

いま、各地の地場産業が衰退、あるいは崩壊しつつあるといわれる。それぞれに細かく見ていくと、その中に高い志を持った企業家がいる、まずは自社で力を蓄え、その力で同志を結集する動きを見せている。その典型的な例が小松社長とその企業であるということだ。

もちろん、小松社長は、1人で島根県、松江市を背負っているわけではない。いま、彼は自分1人が中核になることで、新産業興しの求心力を持つこと、それによってこれから活躍する人々を傷つけず、進むべき道の地ならしをすることを役割と心得ている。

21世紀は、社会変革の志を持つ人が企業家として活躍しながら事業家としての本分を発揮し、新しい地場産業の潮流がつけられていくはずである。

